

■ブラームス、ヘンデルの主題による変奏曲とフリーガ／バガニーの主題による変奏曲（全2巻）



特選盤

藤原由紀乃 (P)
[SPEX①OVCX00022]
¥3000

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 藤原由紀乃が、このたびはブラームスと取り組んでいる。

《ヘンデル変奏曲（フリーガつき）》および《パガニーニ

変奏曲」の上下2巻。いずれも変奏曲という形式を借りて、さまざまなピアノ技法を開陳した名作だが、このような作品においては、このピアノリストの持つ精緻で熟達したピアノリズムが、こよなく生かされる。加えて、ぜひ言いたいのが、藤原由紀乃のつねに漂わせる、言い知れぬ「あたたかさ」である。たとえ難曲を手がけてもけつしてぎすぎすしたり切り口上になつたりすることなく、一種おだやかで、まろやかな雰囲気を保っているのは、たしかにこのピアノリストの美德であろう。ましてや当CDで彼女が心して伝えようとするのはブラームスの内なる声であつて、そのためにはこの誠実なあたたかさ、疑いなく心の火照りから発したそれが、きわめて有効に役立つこととなる。

ブックレットをひもといてみると曲目解説を「杉原由紀乃」という人が書いているが、どなたにも察しがつくように、これはピアノリスト自身のペンネームであるらしい。その解説には、変奏曲の流れに添って、とある若者と娘の物語が、かなり綿々と綴られている。もとより、これをもつて《変奏曲》の正当な解釈とすることはできないが、肝要なのは、ピアノリストがそのようなイマジネーションによって楽曲の表現を行なっている、という事実である。イマジネーションをもつて弾くなら、たとえ奏者の頭に浮かんだそれと、聴きての脳裏を過ぎたそれとが全然噛み合わなかったにしても、そこには純粹な感動が生まれて、残る。

.....
那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 昨年の11月に日本大学カザルスホールで聴いた藤原

のリサイタルは驚きの連続だった。ブラームスの変奏曲だけという意欲的なプログラムで、ピアノという楽器の中に自らの魂を入れようとしているかのような打鍵はまさに完璧で、彼女は音楽と一体となつて、ピアノから生きた音楽が迸り出していた。このアルバムは、コンサートと同一のプログラムがそのほぼ1か月後に録音されたものだ。コンサートでは主題

がさりげなく弾かれてから、変奏曲が次から次へと演奏されて、その濃みない音楽の流れのなかで、ニュアンス豊かな起伏に富んだドラマが展開されたのだが、録音ではそのあたりが違つて、曲による緩急の差や静と動のコントラストはより一層大きくなっている。ご自身でお書きになっているライナー・ノーツの解説によれば、ここでは想像力を膨らませて中世の騎士時代に繰り広げられる音楽物語を展開しつつ、そこで経験される情感を自らの心に重ね合せて演奏しているのだそうだが、それが精巧なドラマトゥルギーと個々の楽曲の表現の純粹さや説得力をもたらししているといえるだろう。それにしても、《パガニーニ変奏曲》のような難曲をなんと易々と演奏しているように聞えることか。それから、先のコンサートでは気にならなかったことがひとつある。彼女のブラームスは強拍が強調されず、それが彼女のブラームスがドイツ語的な固さやイデオロムを感じさせない理由になつているということだ。むしろ、彼女の音楽はそのまろやかな音色や洗練された表現と明快かつ説得力のある情念やドラマトゥルギーによつて、彼女独自の世界を形成しているのだ。間違いなく、第一級の演奏である。

石田善之 ● Yoshinuki Ishida

「録音評」 会場の響きも十分に取り込まれ、中低域の厚い楽器の響きのよさも感じさせるのだが、若干距離があるようで、ひとつひとつの音の繊細性という面は少々薄め。響きの質が高いだけに、音、音場そのものに窮屈さがなくのびのびとした表情を聴かせる。